

レジリエンシーと中学生期の生活満足感との関連

池田 誠 喜*, 芝山 明 義*

(キーワード: レジリエンシー 生活満足感 縦断的調査 生きる力)

1. はじめに

2016(平成28)年度に告示された中学校学習指導要領(文部科学省, 2018)は, 中央教育審議会の答申(2016)を踏まえて, ①これまでの我が国の学校教育の実績や蓄積を生かし, 子供たちが未来社会を切り拓くための資質・能力を一層確実に育成することを目指すこと。その際, 子供たちに求められる資質・能力とは何かを社会と共有し, 連携する「社会に開かれた教育課程」を重視すること, ②知識及び技能の習得と思考力, 判断力, 表現力等の育成のバランスを重視する平成20年改訂の学習指導要領の枠組みや教育内容を維持した上で, 知識の理解の質を更に高め, 確かな学力を育成すること, ③先行する特別教科化など道德教育の充実や体験活動の重視, 体育・健康に関する指導の充実により, 豊かな心や健やかな体を育成すること, の3点をねらいとして改定されたと示している(文部科学省, 2018)。ここで示されたねらいは, 2008年に示された「生きる力」を育むことの重要性を改めて捉え直し, しっかりと発揮できるようにしていくことの重要性を問うものとして理解することができる。

「生きる力」とは, 1996年の中央教育審議会答申において, 「いかに社会が変化しようと, 自分で課題を見付け, 自ら学び, 自ら考え, 主体的に判断し, 行動し, よりよく問題を解決する資質や能力, 自らを律しつつ, 他人とともに協調し, 他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性, たくましく生きるための健康や体力」と示されたもので, さらに, 今回の改定で, 「情報化やグローバル化といった社会的変化が, 人間の予測を超えて加速度的に進展するようになってきていることを踏まえ, 複雑で予測困難な時代の中でも, 生徒一人一人が, 社会の変化に受け身で対応するのではなく, 主体的に向き合って関わり合い, 自らの可能性を発揮し多様な他者と協働しながら, よりよい社会と幸福な人生を切り拓き, 未来の創り手となることができるよう, 教育を通してそのために必要な力を育んでいくことを重視しているが, このような力が学校教育で長年その育成を目指してきた『生きる力』そのものである」ことが明示されている。

このように, 改定された学習指導要領(文部科学省, 2018)において「生きる力」の育成が第一の目標と示されている中で, 「生きる力」に関連が強いと考えられる心理学的概念のレジリエンスが注目されている(例えば 森ら 2002, 原ら 2014)。森ら(2002)は, レジリエンスの概念が「よりよく問題を解決する資質や能力, 自らを律しつつ, 他人とともに協調し, 他人を思いやる心や感動する心を持って, たくましく生きる力」に極めて類似した概念であることを言及した上で, 「逆境に耐え, 試練を克服し, 感情的・認知的・社会的に健康な精神活動を維持するのに不可欠な心理的特性」と述べていることから, レジリエンスが「生きる力」を構成する心の部分に関連している心理学的概念であることが示唆されている(池田・芝山・後藤, 2018)。Kaplan(1999)によると, レジリエンスは発達の良い悪いを説明する用語として50年程前より行動科学者に新しく用いられるようになり, 良好な発達結果が見込まれないと考えられてきた状況にいる人たちの発達過程を縦断的に追った研究により発展してきた経緯がある。

そこで, 近年, 日本において, 逆境を乗り越え対応しうる能力(Grotberg, 2003)として広く認知されつつある心理学的概念のレジリエンスを増強することにより, 学齢期の子どもたちの「生きる力」の育成に寄与する可能性を検討したい。その理由として, レジリエンスのこれまでの調査研究により具体的な増強の方法についての知見が蓄積されていることが挙げられる。生きている中では誰もダメージを受けることは避けられないが, ダメージから回復する力こそ生きる力につながるものと考えている。

*鳴門教育大学教職実践力高度化コース

2. レジリエンシーとレジリエンス

レジリエンスの定義を福丸（2003）が整理して紹介している。例えば、Grotberg(2003)の「避けられない逆境を乗り越え対応しうる能力及びそこから学び、また困難な状況を変化させる能力」やAsendropf & Van Aken (1999)の「特にストレスフルな場面で要求されることに、柔軟に反応する傾向」と示された定義が個人の内的な性格特性や能力に関する心理学的概念として捉えたものである一方で、個々のおかれた環境への適応過程に注目する視点として、池田（2009）が、Lutharら（2000）の「かなりの悪条件下で肯定的な適応を可能にしていく動的な過程」やCowan, Cowan & Schultz(1996)の「ネガティブな結果を導きやすくするようなリスク要因が存在しない場合と同じか、それ以上に良い結果を生み出すよう作用するプロセス」を紹介している。さらに、このような状況を踏まえて、上記の2つの視点をまとめて、困難で脅威を感じる状況にもかかわらず、うまく適応する過程・能力・結果として包括的かつ曖昧な見方が存在する一方で、「能力や特性をレジリエンシーという語を用い、過程に注目する場合はレジリエンスの語を用いる」としたMastenら（1990）の視点も存在する。日本ではこの他に、レジリエンスの意識として、精神的回復力（小塩ら、2002）、逆境（村本、2006）、しなやかな心（森崎、2006）などの表記が散見されている。

本稿では、このようにまだしっかり定まっていないレジリエンスの表記や定義の状況を踏まえ、Mastenら（1990）にならい、レジリエンシーをダメージから立ち直るための力や特性と捉える一方で、レジリエンスをダメージから立ち直るプロセスや結果として捉え表記する。また、本研究においては、精神的なダメージから立ち直るための能力や特性をレジリエンシーとしてして取り上げる。

3. 生きる力と生活満足感

文部科学省（2018）の示す「生きる力」は、多様な要素からなる構成概念であり、その実態を捉えるのが難しいため、測定するツールも試行錯誤の中にあると言える。このような状況において、橘ら（2001）が小中高の教員144名を対象に「生きる力を表す具体的で現実的な言葉」を自由記述により収集し、因子分析とクラスター分析を経て心理的エネルギー、社会的スキル、判断力の3つの要素で構成される心理社会的能力、自己規制、情緒の2つの要素で構成される徳育的能力、日常的行動力と身体的耐性、野外への適応という2つの要素で構成される身体的能力の3つの指標を示した。この結果について橘ら（2001）は、生きる力が提示されたばかりの時期であり、当時の捉え方が知識偏重を避ける風潮を反映したものだとして述べている。一方で、高橋ら（2013）の生きる力の測定尺度は、5つの下位尺度（因子は、a 社会的対処スキル、b 協力量向、c コミットメント、d 共感、e チャレンジ）で構成されており、「生きる力」の中の「豊かな人間性」を中心に生活充実感と生きる力の関連を検討した後に「生きる力」尺度が開発されている。

このような中で、伊藤ら（2005）が、学習の結果として身に付けた「生きる力」が、本当に生きて働く力として子供たちの学校生活に因果的影響を及ぼしているかということについて検討するために、「生きる力」が子供たちの学校生活満足度(QOL)を促進させるという仮説を立て検証を行った。結果、「生きる力」が学校生活の満足度に強い関連があることが示された。このことより、学校生活満足度を把握することにより、操作的に「生きる力」を測定できる可能性が見出された。

学校生活満足度を測定するものとして、学校環境適応感尺度「アセス」（米澤ら、2010）（以下「アセス」と表記）の下位尺度である「生活満足感」があげられる。「アセス」の下位尺度「生活満足感」は、生活全体に対して満足や楽しさを感じている程度で、総合的な適応感を示すもの（栗原、2010）とされ、様々な要因で構成されていると考えられる「生きる力」について、結果的に「生きる力」の要因で対処した結果を示したものと考えることができる。

4. 縦断的データと成長モデル

これまで、多くの研究者に影響を与えてきたレジリエンシーの研究は、時間を追って対象の変化を追う縦断的研究により成果が示されてきた（例えば、Werner & Smith 2001, Silva & Stanton 1996）。日本における縦断的研究について荘島（2017）は「経年変化を捉えたデータ（縦断データ）を分析し、観測された変数間の時間軸上の変化、あるいは因果関係に迫ることは、教育心理学研究において重要性が高まっている状況にあること」と述べ

るとともに「縦断的データ分析について、学校の内外における児童の活動や状態を、時間を追って観察・測定し分析することにより、複雑な児童の心理や行動を説明する上で非常に有効な視点を与えてくれること」を述べ、変数間の時間的変化を捉える縦断的研究調査の重要性を示唆している。さらに、宇佐美（2017）は、縦断的データを収集することの利点として、①興味ある変数に関する時間的な変化（発達・成長）の平均像や個人差について正確に知ることができること、②時間的な変化の個人差が他の変数からどのように予測・説明できるかを知ることができること、③縦断的に測定された複数の変数がある場合、それらの時間的な変化の関係性を知ること、因果関係に迫った推論が可能になること、④上述した①～③に関する集団差が考察できること、の4点をあげている。

一方で、縦断的データの欠点も示されている。第一に、多くの時間的・人的・経済的コストを要すること。第二に統計分析の方法が複雑で高度になりやすいこと。第三として、作業の慣れや記憶などによるデータの歪みの可能性。最後に、データの欠測が生じやすいことがあげられている（宇佐美，2017）。

縦断的データを用いて変数の時間的変化と他の変数からの影響を調べるための統計モデルとして成長曲線モデルが示されている（宇佐美，2017）。室崎（2007）によると、成長曲線モデルは同じ対象に複数回の測定を行って得られる縦断的データに含まれる変数の変化の様相を分析することに特化したモデルで、潜在曲線モデルとも呼ばれていること、値の変化を少数の母数に集約して表現するので、見通しのよい解釈ができるという特徴があることが示されている。以上、「生きる力」に影響を与えるレジリエンシーと「生きる力」の状態の一部を示すと考えられる「生活満足感」の関連を検討することにより、学校教育における「生きる力」の育成が図られることが期待できる。

5. 目的

本研究の目的は、中学生のダメージから回復する力をレジリエンシーと捉え、中学生の同一コーホート集団に対してレジリエンシーと生活満足感の関連について調査を行い、その影響について明らかにすることである。同じ年に入学した公立中学校1年生111名を同一コーホート集団として、3年間の追跡調査を行う。結果を踏まえ、学校教育において育成が期待される「生きる力」に影響する心理学的概念のレジリエンシーが生活満足感に与える影響を検証し、中学生期にレジリエンシーを強化することの意義について検討することを目的とした。

6. 方法

(1) 対象

2015年4月に入学した1学年生徒を同一コーホート集団として1年次、2年次、3年次の3年間在籍し、かつ調査の回答を得られた生徒、男子73名・女子38名、計111名を分析対象とした。

(2) 調査時期

生活満足感調査 2016年3月（1年次） 2017年3月（2年次） 2017年11月（3年次）
レジリエンシー調査 2017年11月（3年次）

(3) 調査材料

① 中学生用レジリエンシー尺度

レジリエンシー測定尺度として、池田ら（2017）の中学生用レジリエンシー尺度12項目を用いた（表1）。中学生用レジリエンシー尺度は「活動意欲性」「対人関係性」「楽観性」「感情コントロール」の4因子構造からなる尺度で、先行研究と同様に回答法は5件法を用い、選択肢は、「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」とし、5～1点を与えた。

② 生活満足感と尺度構造の確認

中学生の生活満足感を測定するため、栗原（2010）の学校適応感尺度「アセス」の下位尺度である生活満足感尺度（6項目）を用いた。回答法は5件法を用い、選択肢は「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」とし、5～1点を与えた。生活満足感尺度（栗原ら，2010）

が学校適応感尺度「アセス」(栗原, 2010)の下位尺度の一つで, 単一で用いるため, 再度因子分析により構造の確認を行った。

主因子法による探索的因子分析の結果, 初期解の固有値の推移は (3.15, 0.99, 0.72・・) となっており, 固有値が1以上, スクリーンプロット(図1)による確認において2つ目の値(0.99)以降緩やかに変化していることから, 単因子構造と考えるのが妥当であると判断した。共通性及び因子負荷量の低い項目(1)が見られたが, その項目を含めた信頼性係数が.80であり, 先行研究にならい表2に示した6項目の単因子構造が適当と判断した。さらに, 構造方程式モデリングを用いて検証的因子分析を行った(図2)。結果, モデル適合度指標は, GFI=.964, AGFI=.915, CFI=.989, RSMESA=.054 となり, 概ね採用できる適合度が示された。

表1 中学生用レジリエンシー尺度項目

項目
第1因子 活動意欲性
いろいろなことにチャレンジするのが好きだ
ものごとに対する興味や関心が強い方だ
新しいことや珍しいことが好きだ
難しいことでも解決するために, いろいろな方法を考える
第2因子 対人関係性
寂しいときや悲しいときは自分の気持ちを人に聞いてもらいたいと思う
つらいときや悩んでいるときは自分の気持ちを人に聞いてもらいたいと思う
うれしくてたまらないときは自分の気持ちを人に話したいと思う
第3因子 楽観性
困ったことがあっても良い方向にもっていく
何事も良い方に考える
自分の未来にはきっといいことがあると思う
第4因子 感情コントロール
動揺しても, 自分をおちつかせることができる
自分の感情をコントロールできるほうだ

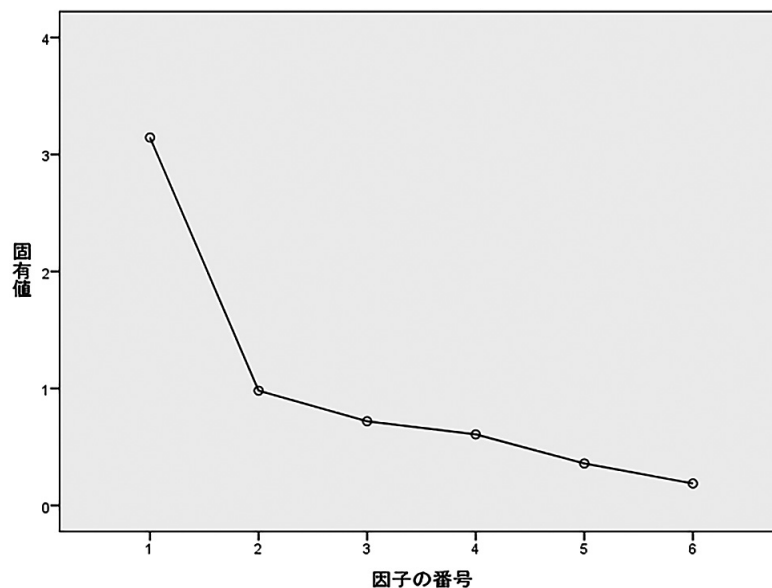


図1 生活満足感尺度因子分析 スクリーンプロット

表2 生活満足度尺度確認的因子分析結果

	I	共通性
生活満足感($\alpha=.80$)		
4. 気持ちが楽である	.89	.24
6. 生活がすごい楽しいと感じる	.84	.63
3. 気持ちがすっきりしている	.80	.80
5. 自分のはのびのびと生きていると感じる	.55	.30
2. まあまあ自分に満足している	.49	.71
* 1. なんとなく落ち着かないことがある	.25	.06
*逆転項目	寄与率 (%)	52.42

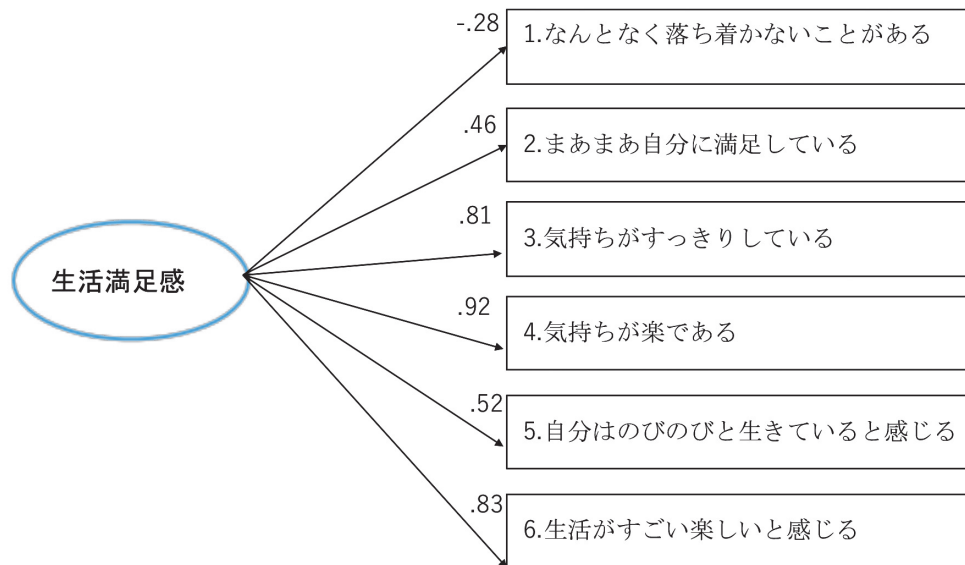


図2 生活満足感尺度 検証的因子分析

(4) 手続き

生徒に対しては、1年に1回、計3回とも同様の手続きで実施した。心的負担を考慮し、無記名方式で学級ごとに担任教師による集団調査を行った。回答法については、研究者が調査対象校教職員に調査の趣旨を説明し、生徒が思ったままを答えることができるよう配慮することを求めた。回答に要した時間は約10分であった。

7. 結果と考察

(1) 尺度得点

中学生用レジリエンシー尺度の下位尺度得点の平均と標準偏差及び1年次～3年次までの生活満足度得点の得点の平均と標準偏差を表3に示す。

表3 尺度得の平均と標準偏差

		平均	標準偏差
【中学生用レジリエンシー尺度】			
第1因子	活動意欲性	10.23	3.94
第2因子	対人関係性	5.80	3.35
第3因子	楽観性	5.41	3.33
第4因子	感情コントロール	5.42	2.82
【生活満足感尺度】			
	1年次	21.86	4.98
	2年次	20.00	5.51
	3年次	19.06	5.63

(2) 生活満足感の変化の検討

3年間の生活満足感の変化を検討するために、反復測定分散分析を行った(表4)(図3)。結果、年次ごとの生活満足感得点に有意な差がみられた($F(1,110) = 2311.13, p < 0.01$)。多重比較の結果(Bonferroni法, 5%水準)。1～3年次まで、学年が上がるにつれて生活満足感が有意に低くなっていることが確認された。

表4 3年間の生活満足感得点の平均値、標準偏差、分散分析結果

	平均	標準偏差	自由度	F値	多重比較
1年次	21.86	4.98			
2年次	20.00	5.51	1, 110	2311.13 **	1年>2年>3年
3年次	16.30	5.63			

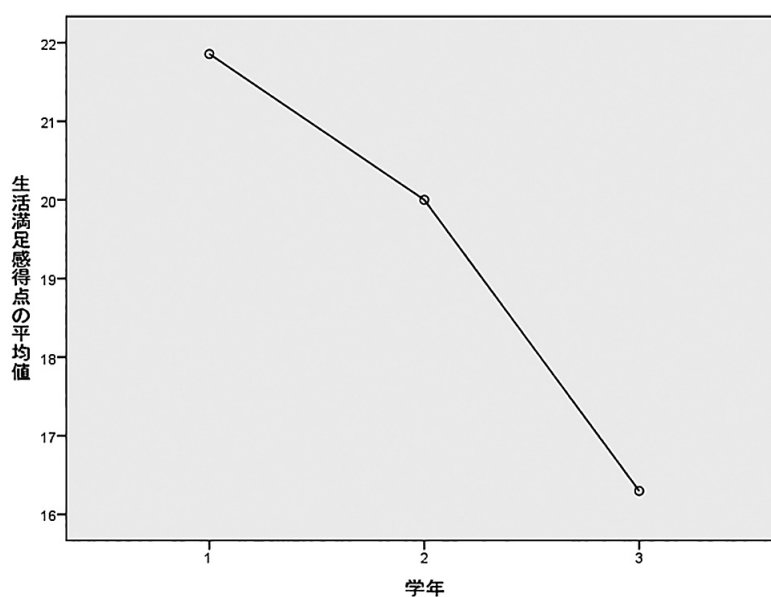
** $p < 0.01$ 

図3 生活満足感得点の平均値のプロファイル プロット

(3) 成長曲線モデルによる推定

成長曲線モデルを用いて、3年間の生活満足感についての切片と傾きに対して、レジリエンシーが及ぼす影響を検討した。まず、「傾き」から観測変数へのパスを0、1、2と固定して分析したところ、モデルの適合度を示す指標が、 $\chi^2=9.068$, $df=5$, n.s, CFI=.931, RSMEA=.084であった。図3で示した通り、成長曲線が直線で表現されないことが推察されたため、小塩（2005）に従い、「傾き」から観測変数へのパス係数の固定を、それぞれ（0, なし, 1）に変更して分析を行った（図4）。結果、 $\chi^2=3.486$, $df=4$, n.s, CFI=1.00, RSMEA=.000となり、本モデルの適合度が高いことが確認された。レジリエンシーから「切片」への推定値は-.32で、レジリエンシーから「傾き」への推定値は.43であった。これは、レジリエンシー得点が1点高い場合「傾き」は-9.65より.43大きくなることを示している。

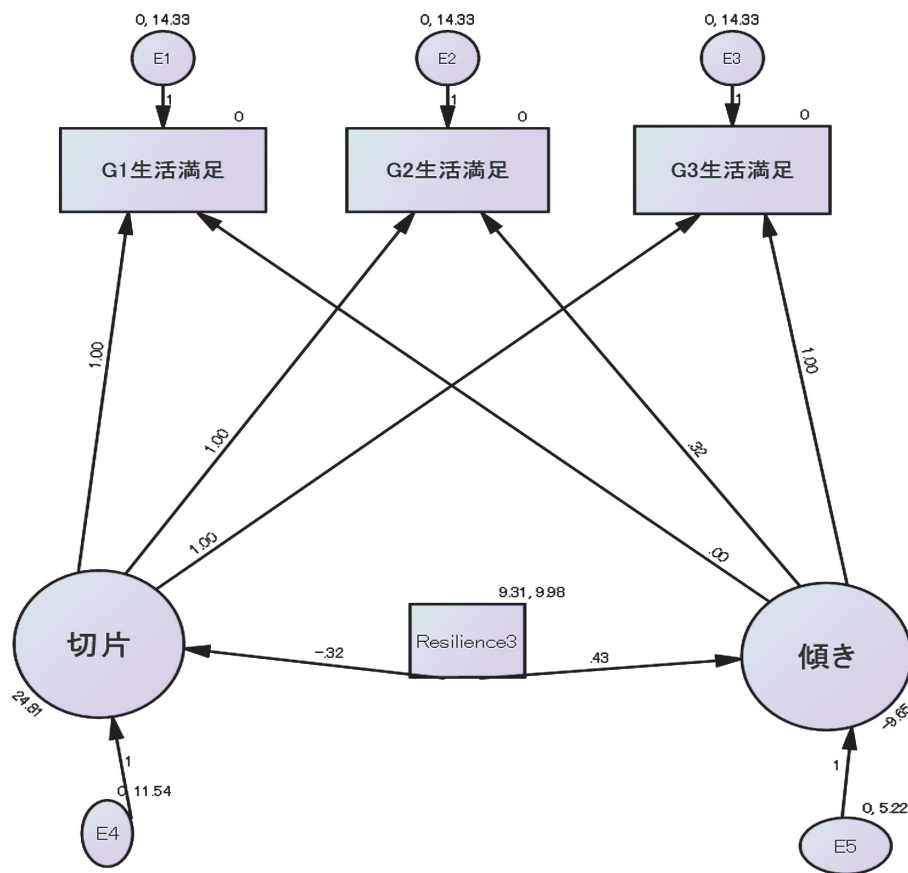


図4 レジリエンシーの切片と傾きへの影響（非標準化推定値）

(4) 考察

中学生の生活満足感は学年が上がるにつれ低下していく状況が示されている。このことは、鎌田ら（2019）や中村ら（2002）の「中学生から次第に自己に対する満足感が低下している」という指摘や、内閣府（2014）による「自分自身に満足している」についての国際比較調査において、自分自身に満足している者の割合は5割弱で、経年変化の推移では中学生から次第に低下しているという結果と一致している。

一方、中学生用レジリエンシー尺度と生活満足感尺度を用いた3年間の縦断的調査で収集したデータによるレジリエンシーと生活満足感との関連を成長曲線モデルで分析検討した結果（図4）、レジリエンシーから「切片」「傾き」へのパスの非標準化推定値の値から、学年が進むにつれ生活満足感が低下している状況の中で、3年生時にレジリエンシーが活性化している生徒は生活満足感が変化しにくいという状況が確認できた。学年が進み年齢が上がるにつれて高まると考えられるストレス状況の中でも、中学生の最終学年である3年生の時点のレジリエンシーが機能している生徒は、生活満足感の低下を防ぐ効果があることが示唆された。

学年が進むに連れて学校教育の効果として資質・能力が高まっていくことが期待される中で、「生きる力」の様相を表すと考えられる学校生活満足度の低下に対する保護的な要因を示すことは学校教育にも有益な情報をもたらすものになると考えられる。

佐藤（2013）は、「生きる力」に対して、下位要素としての資質・能力・人間性・健康体力が挙げられている中で最終的には資質・能力の2つのカテゴリーに集約されていることを批判するとともに、末期がん患者の限られた命における「生の質」の価値を取り上げ、「生きる力」からイメージされる生きる強さに焦点を当てた人間像だけが強調されていることに異論を唱えている。実際、現在、「生きる力」の育成を掲げる学校教育では、依然として資質・能力を伸ばすという考えが教育の中心として多くを占め、それに応えられない子供たちが行き場を失っているように見える。レジリエンスはダメージを受けてもなんとか回復しよとする「生き方」に焦点を当てており（池田，2009），ダメージを受けている子供にも必要な力となると思われる。本研究で示された，レジリエンシーの機能を高く保っていることにより生活満足度を低下させないという結果は、「生きる力」の育成を目指す学校教育を補完することになるのではないだろうか。「生きる」ための強さの獲得だけでなく，ダメージを受けて立ち上がれないような弱さに対しても存在や生き方そのものに価値を与えるものとして期待できる。

最後に，今回，同一コーホートの3年間の生活満足度の変化に対して，3年生時のレジリエンシーの機能のみの影響について検討した。3年生時にレジリエンシーの機能が良好もしくはある程度の機能を保っている者は，1・2年生時もレジリエンシーの機能は概ね良好であろうという考えのもと，1年生時のレジリエンシーの状況，2年生時のレジリエンシーの状況の影響については検討できていない。今後の課題として，各学年時点におけるレジリエンシーの機能との関連を検討する必要がある。

本研究は，JSPS 科研費 JP19K02586の助成を受けたものです。

【引用文献】

- Asendorpf, J.B., & van Aken, M.A.G. (1999) Resilient, overcontrolled, and undercontrolled personality prototypes in childhood: Replicability, predictive power, and the trait-type issue. *Journal of Personality and Social Psychology*, 77, pp.815-832
- 中央教育審議会（2016）幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf 2019年8月25日閲覧）
- 中央教育審議会（1996）（21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申））（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/960701.htm 2019年8月25日閲覧）
- Cowan, P. A., Cowan, C. P., & Shultz, M. S. (1996) Thinking About Risk and Resilience in Families. In Hetherington, M., & Blechmn, E. A. (Eds.), *Stress, coping and resilience children and families*. Mahwah, NJ: Eelbaum
- 福丸由佳（2003）個人の発達と resilience 聖徳大学家族問題相談研究，No. 2, pp. 3-10
- Grotberg, E.H. (2003) *Resilience for Today*. Prager
- 原 郁水・都筑繁幸(2014)小学5年生のレジリエンスを高める授業の効果 教科開発学論集，第4号，pp. 33-45
- 伊藤武樹・葛西敦子・小倉尚子・伊藤菜緒（2005）小学校児童における「生きる力」と学校生活満足度についての因果関係 弘前大学教育学部紀要，第93号，pp. 65-76
- 池田誠喜（2009）児童・生徒のレジリエンス育成に向けてーレジリエンス研究の歴史と学校教育適用への展望ー東洋大学大学院研究紀要，第45集，pp. 437-458
- 池田誠喜・後藤正彦（2017）中学生の生活満足度とストレス反応に影響を与えるエンゲイジメントとレジリエンシーの関連 生徒指導学研究，第16号，pp. 52-61
- 池田誠喜・芝山明義・後藤正彦（2018）レジリエンスと関連する心理的概念の特徴と学校教育への適用 鳴門教育大学研究紀要，No. 33, pp. 184-198
- Kaplan, H.B. (1999) Toward an Understanding of resilience A Critical Review of Definitions and Models resilience In Glantz, M. D., & Johnson, J. L. (Eds.). *RESILIENCE AND DEVELOPMENT*. Kluwer Academic/Plenum Publishers, pp.17-84
- 鎌田淑博・池田誠喜・芝山明義（2019）中学生の自己有用感と生活満足度との関連 兵庫教育大学 教育実践学論集，第20号，pp. 49-58

- 栗原慎二（2010）アセスとは 栗原慎二・井上弥（編著）アセスの使い方・活かし方, ほんの森出版, pp. 8-13
- 米沢崇・山田洋平（2010）アセスの理論的背景と開発手順 栗原慎二・井上弥編著 アセスの使い方・活かし方 ほんの森出版, pp. 65-79
- Luthar, S. S., Cicchetti, D., & Becker, B. (2000) The construct of resilience: A critical evaluation and guidelines for future work. *Child Development*, 71, pp.543-562
- Masten, A.S., Best, K., & Garmezy, N. (1990) Resilience and Development: Contribution from the study of children who overcome adversity. *Development and Psychopathology*, 2, pp.425-444
- 文部科学省（2018）中学校学習指導要領 解説 総則編, 東山書房
- 森 敏昭・清水益治・石田 潤・富永美穂子・Chok C. Hiew（2002）大学の自己教育力とレジリエンスの関係 広島大学教育学部附属教育実践総合センター学校教育実践学研究, 8, pp. 179-187.
- 森崎和代（2006）しなやかな子どもの心 生き抜く力を育む レジリエンスの視点から 女性ライフサイクル研究第16号, 女性ライフサイクル研究所, pp. 31-35
- 村本邦子（2006）レジリエンス 逆境を生き抜くために 生き抜く力を育む レジリエンスの視点から 女性ライフサイクル研究第16号, 女性ライフサイクル研究所, pp. 5-14
- 室崎弘人（2007）成長曲線モデル 豊田秀樹編著 共分散構造分析 東京図書, pp. 89-98
- 内閣府（2014）『平成26年版子ども・若者白書』（https://www.8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h26_honpen/pdf_index.html 2019年8月25日閲覧）
- 中村仲枝・兼松百合子・遠藤巴子・佐藤浩一・宮本茂樹・野田弘昌・大西尚志・今田進・佐々木望（2002）小学校高学年から中学生の生活の満足度(QOL)質問紙の検討 小児保健研究, 61（6）, pp. 806-813
- 小塩真司・中谷繁之・金子一史・長峰伸治（2002）ネガティブな出来事から立ち直りを導く心理的特性 カウンセリング研究, 35, pp. 57-65
- 小塩真司（2005）研究事例で学ぶ SPSS と Amos による心理・調査データ分析, 東京図書
- 佐藤年男（2013）「生きる力」論批判ノート（その1）三重大大学教育学部研究紀要, 第64巻, 教育科学, pp. 397-311
- Silva & Stanton (1996) *From Child to Adult The Dunedin Multidisciplinary and Development Survey*. 酒井厚（訳）ダニーデン子どもの健康と発達に関する長期追跡研究 ニュージーランドの1000人・20年にわたる調査から, 赤石書店
- 荘島宏二郎（2017）企画趣旨 縦断でデータ分析のはじめの一步と二歩 *The Annual Report of Educational Psychology in Japan*. Vol.56, pp.291-298
- 橘直隆・平野吉直（2001）生きる力を構成する指標, 野外教育研究, 4（2）, pp. 11-16
- 高橋智子・竹嶋飛鳥・青木多寿子（2013）児童の生活体験・生活充実感と「生きる力」の関連について, 学習開発学研究, 6号, pp. 3-9
- 宇佐美慧（2017）縦断データ分析の基礎 縦断でデータ分析のはじめの一步と二歩 *The Annual Report of Educational Psychology in Japan*. Vol.56, pp.291-298
- Werner, E.E., & Smith, R.S. (2001) *Journey from Childhood to Midlife Risk, Resilience, and Recovery*. Cornell University Press

Relationship between resiliency and life satisfaction during the junior high school years

IKEDA Seiki* and SHIBAYAMA Akiyoshi*

The purpose of this study was to examine the relationship between resiliency and life satisfaction for the same cohort group of junior high school students, and to clarify the effects of resilience.

We surveyed 111 first-year public junior high school students enrolled in the same year as the same cohort group, and conducted a three-years follow-up survey.

As a result, we were able to confirm that life satisfaction is less likely to change for students whose resilience is activated when they are in their third year, as life satisfaction declines as the grade progresses.

*Advanced Educational Practitioner, Naruto University of Education